こうして、はじめて出来た土地を野といいました。
この野を中心に、だんだん田畑がふえていきました。
あるとき、弘法大師の教えをうけた人がやってきて、ここで薬草のあざみ草を作って乾かして大和地方に売りにいきました。
それから村人もあざみ草を作るようになったのです。
このあざみ田が、「あぞうだ」になったということです。

## ㊺ こんか虫おくりのはじまり

これは、苗生田で戦国時代に起こった出来事や。その日村では、敵味方入り乱れての合戦の最中やった。馬にまたがった勇敢な武将が、ここが勝負所とみて、勢いよく先頭きって敵に攻め込んだときのこと。



「皆の者、いまぞ。我に続けぇ。」
敵はあまりの迫力に恐れおののき、次々と田んぼの中へ逃げ出した。
武将はますます勢いに乗り、敵を蹴散らそうと馬に気合を入れた。
ところがや、馬は慣れん田んぼの中を走ったもんやで、小さな稲株に足をとられ、ドッテーンとこけてしもた。
放り出された武将、我にかえり何とか立ち上がったが、時既に遅しで、大勢の敵に囲まれてしもてた。
形勢は逆転、勝ちを確信していた武将の無念さは半端やなかった。
「無念じゃ。まちがいなく勝っておったのに。あの稲株さえなければぁ…」
武将は敵ではなく稲株を恨みながら息途絶え、その年の戦は終わった。

さて、奇妙なことに、それからこの付近の田んぼ一面にこんか虫がワンサとわくようになり、村人たちは、とんと困りはててしもた。

「このままでは、米が取れんようになってしまう。しかしまた何でこんなにこんか虫が出るようになったんやろ。」

「もしかしたら、あの武将のたたりやないやろか。そうや、きっとそうに違いない。何とかせなあかん。」

村人は相談し、皆で松明をもって、こんか虫を追い払うことにした。そのお陰で何とか無事お米がとれたんやと。

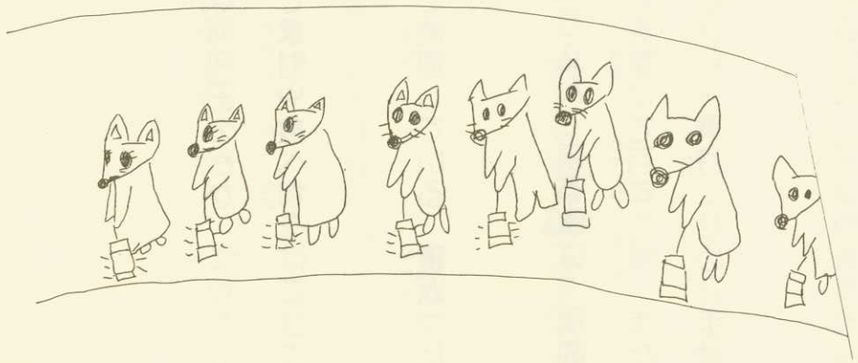
それから茆生田では、毎年夏に「こんか虫おくれ。」と大声で叫びながらあぜ道をねり歩くようになったんや。

四百年以上たった今でも、この虫おくりの伝統行事は守り続けられている。



## ㊻ キツネの嫁入り（キツネのちょうちん）

むかし街灯なんて一本もなかったころ、お月さまの出ん晩はまっくらやみで、河和田のあちこちで「キツネの嫁入り」が見れたんや。点々と青い灯をともしては次々に消して、又ともすんや。まるで嫁入りの行列が遠くを歩いて行くみたいにな。

別司から小坂、茆生田にかけて、向山の方を灯の行列が行っては又もどってくる。西袋、椿坂ではながそのあたりを、百メートルくらいかの。上の方では清水町（東清水町）から上河内の川ぞいや。

やみ夜にキツネの目玉が光ってたんやろかのぉ。年寄りの人に聞いてみたらいい。見たことある人も多いから。